

# 縄文杉探勝ルートにおけるガイドの意義

馬場 健

キーワード：レクリエーション，オーバーユース，エコツーリズム，ガイド，利用者意識，混雑感，満足感

## 1. 研究の背景と目的

最近のレクリエーション利用において、自然地域のオーバーユースによる「自然環境の劣化」や「利用体験の質の低下」が問題になっている。これら問題解決のためにガイドの役割が重要視されるようになってきた。はたしてガイドがいることによって、利用者は環境に負荷をかけない利用を達成しているのだろうか？ 今回の研究では、屋久島の縄文杉探勝ルートを対象として、ガイドの存在によって「利用者意識」と「情報および装備の充実度」にどのような違いがあるかどうかを明らかにする。その結果から、自然環境の保護と利用のコーディネーターとしてのガイドの役割と意義を明確にすることを目的とする。なお、利用者意識とは、「オーバーユースによるとされる問題に対する評価」、そして「満足感」、「自己インパクトの認識」の3つを指すものとする。

## 2. 調査対象地と調査方法

調査は、アンケート調査を行った。調査地はオーバーユースが顕在化している鹿児島県屋久島の縄文杉探勝ルートである。縄文杉が位置するのは、国立公園地域であり、世界遺産地域でもある。ここに年間約4万人が訪れる。観光客が集中する時期は限られていて、ゴールデンウィークと夏休みが最も多い。調査時期は2004年9月末の休日祝日が連続した時期で、夏休みと同等の人出が見込まれた。下山してきた利用者10人おきに質問票を配布し、その場で回答を記入してもらった。質問項目は利用者の属性、オーバーユースが原因と言われている問題に対する評価など利用者意識に関わる項目や情報認知度、装備充実度などである。これらの回答内容から、ガイドの有無によって利用者の意識に差があるかどうかを統計的手法を用いて分析した。

## 3. 利用者意識について

分析の結果次の3点が明らかになった。①「ガイドは、利用することによる自然環境への影響に対する認識を高めていた。」ガイドがない場合は、利用者は自分の行為による影響より、他人の行為による影響に敏感だが、ガイドがいる場合には、自分の行為による影

響の認識が高まった。②「ガイドは登山ルートの混雑を感じさせない。」③「ガイドは利用者の装備負担を軽減し、時間と利用者の体力に配慮した利用を実現している。」一方、景観ポイントの混雑に対する評価や満足度については、差は見られなかった。それは縄文杉探勝ルートの利用者が、自然や景観を楽しむことを目的とした「登山客」ではなく、縄文杉に辿り着くこと、縄文杉を見ることを目的とした「観光客」であることに起因していると考えられる。

検定結果：利用者意識における経験とガイドの有無による差

	Mann-WhitneyのU検定	経験値	ガイドの有無
		$p$	$p$
問題項目	トイレ混雑	0.448	0.331
	ウィルソン株混雑	0.925	0.519
	縄文杉混雑	0.644	0.392
	休憩所混雑	0.437	0.630
	登山ルート混雑	0.619	<0.01
	登山口混雑	0.667	0.108
	コケ・植物の踏みつけ	<0.05	0.269
	歩道の洗掘や浸食	0.149	0.847
	裸地化	<0.05	0.767
	排泄物による汚染	0.676	0.809
	ゴミの散乱	0.758	0.659
	餌付けによる人馴れ	0.122	0.942
満足度	0.872	0.116	
自己インパクトの認識	0.734	0.184	

研究結果	ガイド有り	ガイド無し
オーバーユース問題の捉え方	自分自身の自然環境への影響の認識高い	自分自身の自然環境への影響の認識低い
登山ルートの混雑	気にしない	気にする
装備所有量	少ない	多い
	個人差が小さい	個人差が大きい

ガイドを利用することで体験の質は向上し、ガイドすることが地域の活性化や環境意識に繋がる (Kerley, Graham I.H., 2003) と言われる。屋久島の森は、古くから地元の人々の信仰の対象であり、木材の供給源であり続けてきた。屋久島の森には歴史・文化の多様性が眠っている。これら屋久島の資源をガイドが巧く活用することによってさらに地域が活性化するはずだ。今回の研究で示されたように、「利用者の自然環境への認識を高める」ことのできるガイドが活躍することは、自然環境への負荷が少なく、体験の質が高い資源利用に繋がると考えられる。

引用文献：Kerley, Graham, I. H., Geach, Bev. G S., & Vial, C.(2003). Jumbos or Bust: do tourists' perceptions lead to an under-appreciation of biodiversity? South African Journal of Wildlife Research, 33(1), 13-21